

翻訳にあたってのヒント

その6

1. 三つの「S」:

最近、情報化で収益力を回復した従来型の米大企業復活の原動力になり、それらに共通している三つの「S」を取り上げてみます。

その三つの「S」とは、“Speed”、“Strategy”、“System”だそうです。これらの日本語訳は、それぞれ「スピード（意志決定の迅速化）」、「ストラテジー（知恵の戦略的配分）」、「システム（技能の効率的利用）」となっております。

これらを「スピード（速度）」、「ストラテジー（戦略）」、「システム（体制や体系等）」とするよりも、先の和訳の方がはるかに適訳であるように思われました。意味がとらえずらい英語をそのままカタカナ語に訳して、簡潔明瞭な日本語補足訳を付けたうまい訳出例だと思ったので、ここに掲載しました。

2. 日本語の語順について:

“I give it to you.”あるいは“I give you it.”という極めて簡単な英語文を日本語に訳すとなると、様々に訳出できるという事例をご紹介します。

「主語～が」で叙述する場合:

- ① 「私がそれをあなたにあげる」
- ② 「私があなたにそれをあげる」
- ③ 「あなたにそれを私があげる」
- ④ 「あなたに私がそれをあげる」
- ⑤ 「それを私があなたにあげる」
- ⑥ 「それをあなたに私があげる」

「主語～は」で叙述する場合:

- ⑦ 「私は、あなたにそれをあげる」
- ⑧ 「私は、それをあなたにあげる」
- ⑨ 「あなたには、私がそれをあげる（あなたは、私からそれをもらう）」
- ⑩ 「あなたには、それを私があげる（あなたは、それを私からもらう）」
- ⑪ 「それは、私があなたにあげるものだ」
- ⑫ 「それは、あなたに私があげるものだ」
- ⑬ 「あげるのは、私からあなたへのそれだ」
- ⑭ 「あげるのは、それで私からあなたへのものだ」

どうでしょうか？ こんがらがってくると思いませんか。この極めて単純な例文の英語ではわずか 2 パターンでしか言い表せないのに（この意味では英語の方が文法にがんじがらめになっている）、日本語になるとこの 14 パターンが考えられるのです。これは一つには、

日本語の文では順序を自由に換えられるということのほか、読点が自由に打てるという柔軟性によるものだと思います。こんなところにも、誤訳は別として、翻訳者に英語を日本語に翻訳させるとなると、十人十色の和訳が出てくるという否めない事実の確証にもなると思います。ただし、日本語を読みやすくするという観点からすれば、長い部分を前におくほうが読みやすくなるという原則もみられるようですが、「直訳・意識・超訳」とさかんに叫ばれていることに関係なく、やはり翻訳で最終的にいきつくのは前後の文脈に応じた「適訳」だけだと思われ、その場合でも何種類かの訳出パターンが必ず生じるものだと自負しております。これは言い換えれば、翻訳に 100 点満点はありませんということも裏付けるほんの一例です。